

05. 現在の図書館の在り方

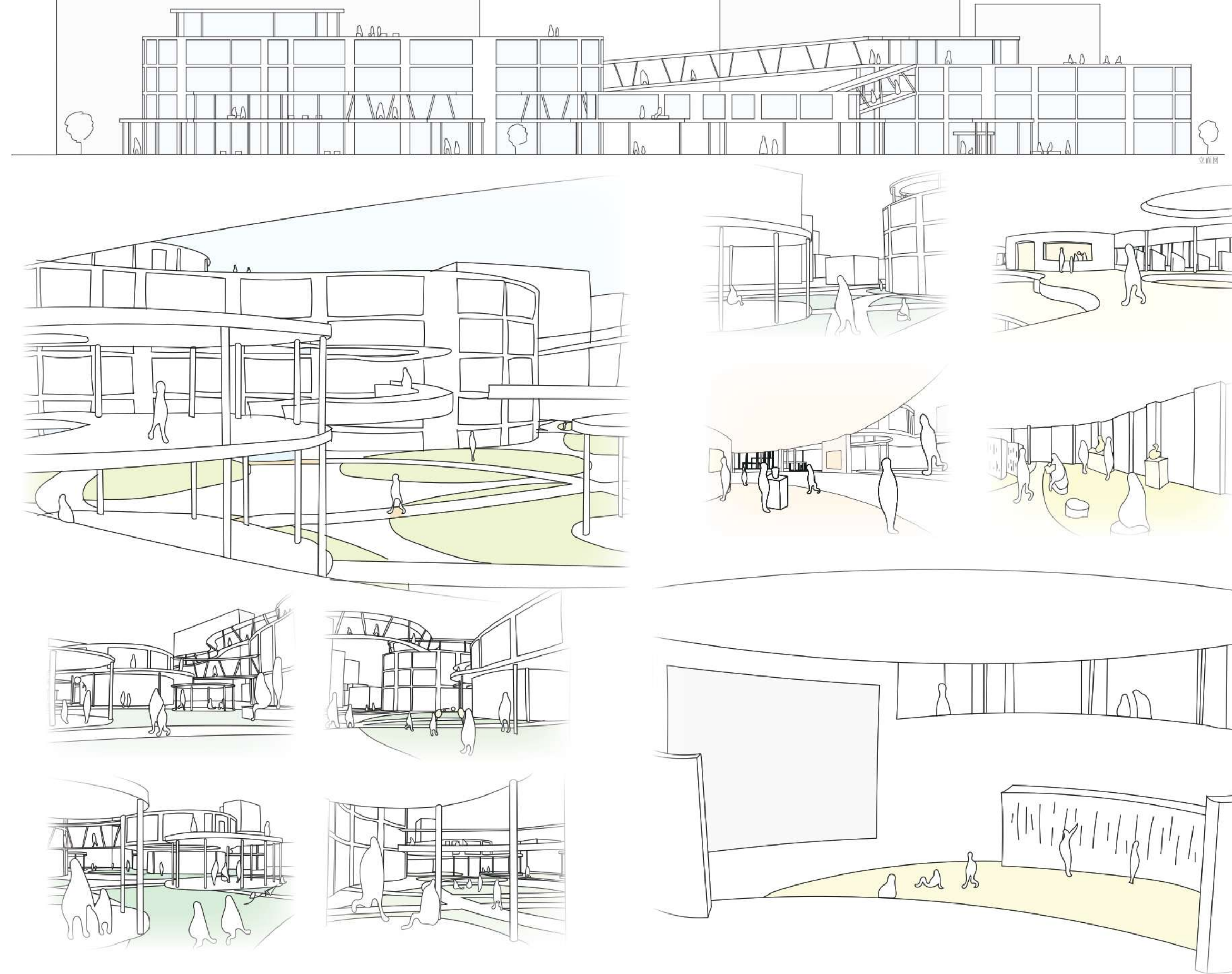
メディアの多様化により図書館離れが起きている。中でも地方都市における図書館の利用率が特に減少している。そこで今日の地方都市の図書館の性質を知るために、静岡県浜松市にある既存の図書館 23 館 1 分室を調査する。調査方法としてアントネッラ・アンニオリの「地の広場」に記されている、心地の良い図書館に必要な 21 の要素に加え、今日の状況から見た独自の指標を加えた、計 29 の指標を用いる。

その結果、周辺環境や施設形態、開架開架空間の問題はなかったが、居場所に関する指標該当率が、著しく低いことが分かった。つまり、図書館がゆつくりと人と触れ合ったり、本をきっかけに人と関わりをもったり、活動をしたりと、カタチを生み出す場が少ないということである。



06. 動きが集まる広場とは

自分の好きな時に、好きな場で、好きなだけ、好きなことをできる。そして多くの可能性を秘めている。それが広場である。また広場には多くの人や活動が集まるため、それにより広場の顔が異なってくる。つまり自分たちで自由に広場の顔を作り上げ、周りを巻き込んでいくことができる。

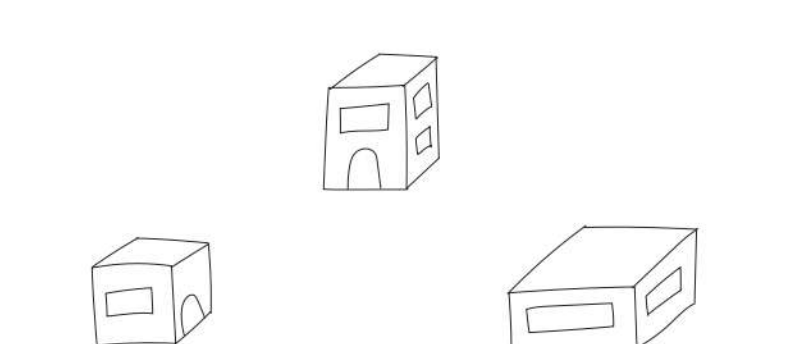


09. 紙のカタチが集う場

めまぐるしく時代が変わる中、本という存在は変わることなく、残り続けている。そして、その本を守る役割を果たしている図書館もまた、消えることはない。しかし周辺環境や求められるものは変化し続けており、その時代や場に合わせたカタチが求められている。そこで自分たちで好きなように空間とカタチを作れる、広場のような図書館を提案する。

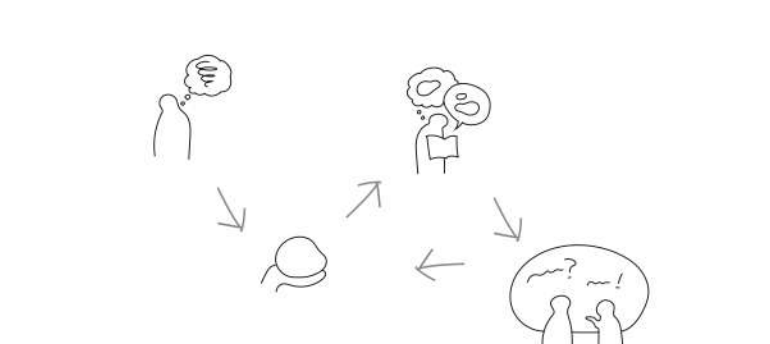
3つの新しいカタチ

分棟型図書館：ひとつのものを分けることで、間に空間が生まれる。それにより地域と触れる面積が増え、居場所ができていく。



カタチの誘発：自由で開放感のある広場で、カタチの創造を後押しする。また他機能と隣接させることで、可能性を広げ、出会いと繋がりを増やす。

自立性：自分の意思で進む道を決め、足で歩み、手にとり、口で会話して、直接物事に触れ合う。そうすることで失われかけている、出会いの楽しさを感じる。



10. 都市の余白

都市という機能に囲まれた密空間のなかに、公園のような場を設けることで、自由な余白が生まれ、一息つくスペースとなる。また、立体化した広場から改めて都市を眺め、何気なく過ごしている日常の中で、新たな発見をし、自分の生活に新たな光を取り入れることができる。

そしてこれからより都市化が進むであろうこの時代に、広場は変わることなく残り続けていく。

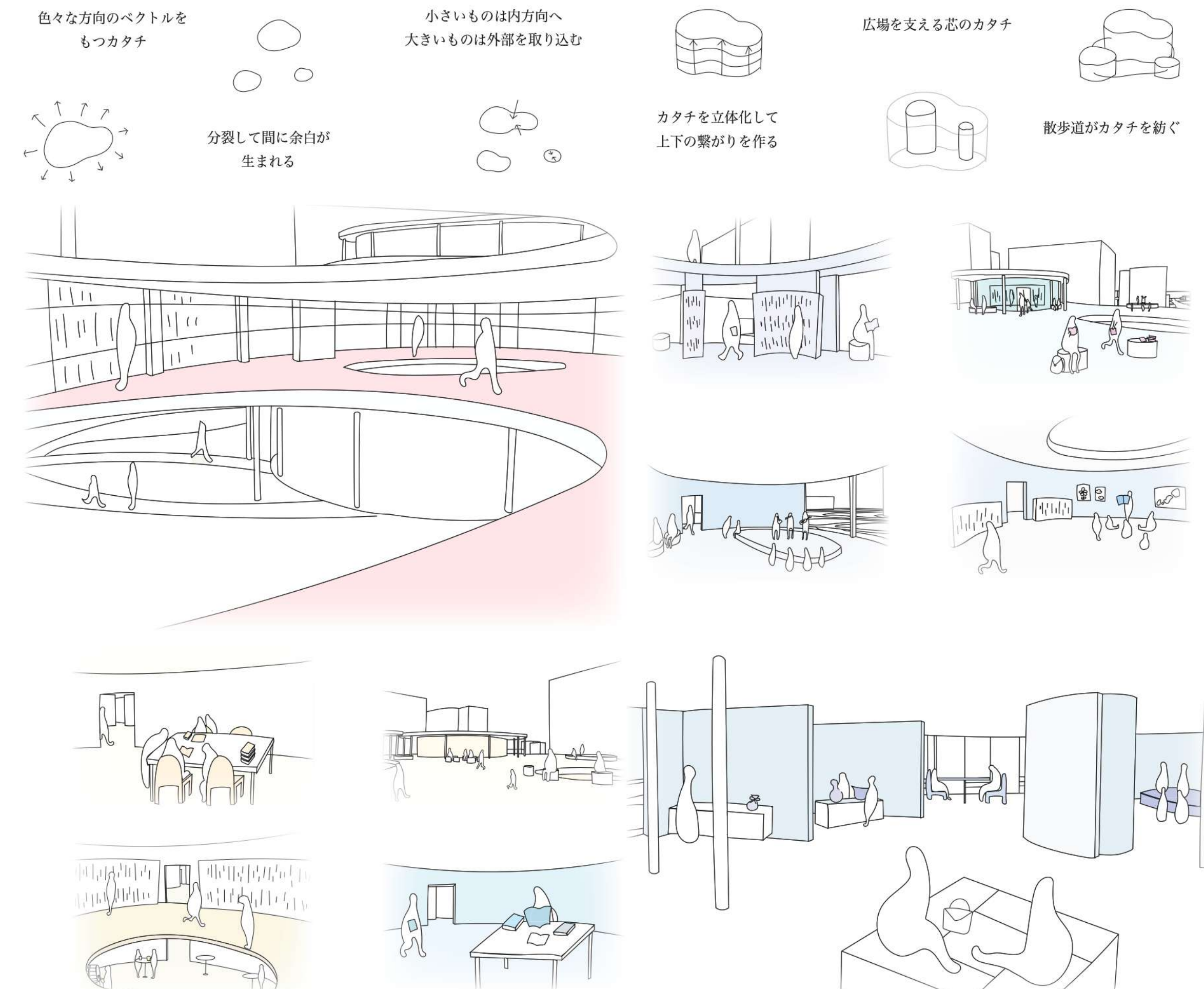
07. 広場の立体化

広場は広く開いた場であるが、自由に活動できるスペースは限られている。そこで広場の立体化を行い、より多くの空間を作る。それにより広場内で行われている活動に横だけでなく、上下の繋がりも生まれ、より多くの事柄と触れ合いながら、過ごすことができる。

天井高を抑えることにより、日常的な空間の中で、動き回る
それにより吹き抜けの広い空間が際立ち、意識的に上下の繋がりがくを感じることができる



08. カタチの建築

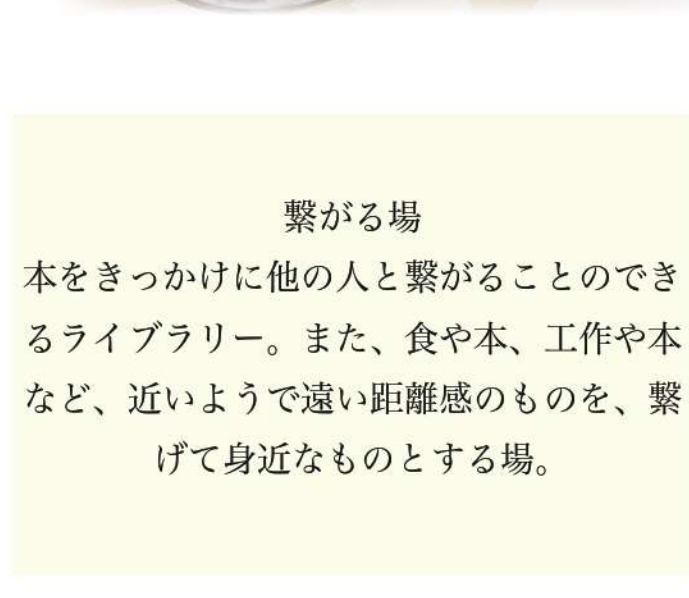


3つの関わり方

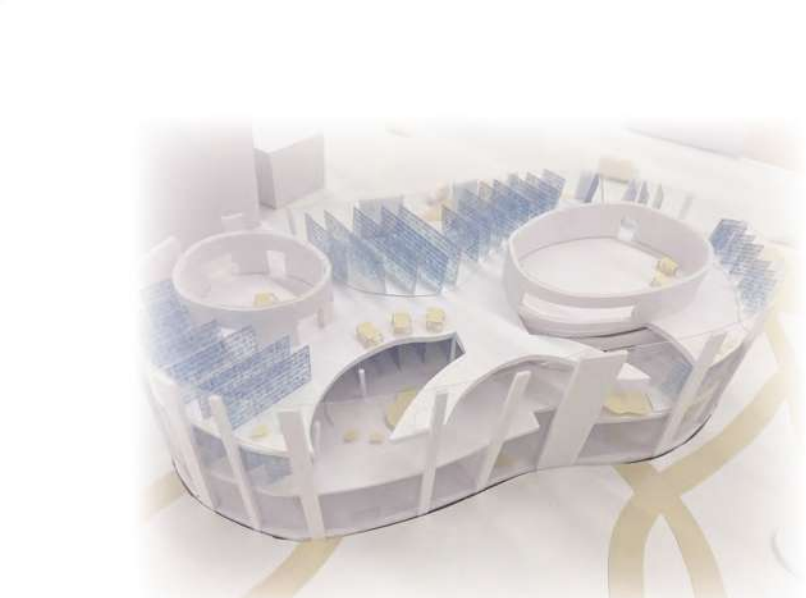
出会う場
数多くの種類の本が散らばっており、その中から自分の気になる本と出会い、手に取る。そして好きなところに戻し、その本と次の人との出会いのきっかけを作る。



触れ合う場
本を自分のものとするためには、立ち止まり触れ合う必要がある。そこで外や中、隅や中心など、多くの閲覧場所を用意し、自分の好きな場で、好きなだけ触れ合えるライブラリー。



繋がる場
本をきっかけに他の人と繋がることのできるライブラリー。また、食や本、工作や本など、近いようで遠い距離感のものを、繋げて身近なものとする場。



11. 居場所

無数の広場と、3つの建物を、いくつもの散歩道の輪が紡いでいる。そしてあらゆるところに居場所が用意されている。

